

後藤雄介著「語学の西北」現代書館 2009年3月25日を読む

## 語学の西北

1. 語学の「西北」へ向かうとはつまり、外国語の延長線上にある異文化——これらを総じて「他者」と呼んでもいいだろう——に付きまとっているイメージと、想像力たくましくかつ思考力しなやかに向き合い、それを突き破っていくことに他ならない。だって、新たな外国語の学習によって得られるものが予め想定した範囲を越えないとすれば、そんなつまらなく、もったいない話もないじゃないですか。

2. 異文化のステレオタイプをいわば打破するのが「語学の西北」へ向かうことの意味だとして、では、ひとたび「語学の西北」へ立つとすればなにが見えてくるのだろうか。

だれしも「自分のことは自分が一番よく知っている」と自負するように、「日本人のことは日本人が一番理解している」と思うだろう。それはある面で正しいが・・・

### [コメント]

何のために外国語を学ぶのか。その言語を用いてのコミュニケーションをするためと言うが、その本当の意味は何か。外国語学習によって得られるものは何か。興味つきない外国語学習論。語学を学ぶ人、教える人にとって有難い一書。

- 2010年7月13日林 明夫記 -